2008 年 2 月 28 日

私立大学図書館協会
国際協力委員会
委員長　丸本　操　様

立教大学図書館
伊藤　秀弥

2007 年度海外派遣研修報告書

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．研修参加目的
Ⅲ．モーテンソンセンターの概要・研修参加者内訳
Ⅳ．アソシエイツプログラムの概要
Ⅴ．米国図書館における動向
Ⅵ．総括

The Final Report

Ⅰ．はじめに

このたび、私立大学図書館協会国際協力委員会の海外派遣事業により、The Mortenson Center of International Library Program、University of Illinois（以下、モーテンソンセンター）の Fall Associate Program に参加した[1]。期間は、2007 年 9 月 4 日から 11 月 2 日までの 8 週間であった。なお、私立大学図書館協会国際協力委員会からの派遣は 2003 年から毎年続いており、2007 年は 5 人目の参加である。参加にあたっては、立教大学の職員海外研修制度の適用も受けた。

本稿では、プログラムの概要に沿って、米国の大学図書館の現状や図書館員の姿について紹介し、わずか２か月間の経験を基にした管見ではあるが、学習・研究支援のための図書館サービス実現にむけて，自己革新を続ける米国大学図書館のさまざまな取り組みを紹介し，今後の私立大学図書館の取り組みに参考になるように情報提供を試みたい。

Ⅱ．研修参加目的

１．研修参加までの背景と問題意識

図書館での業務の中で、日々発生する個別具体的な問題を対処する中で、様々な問題意識を有するようになった。さらに自らの図書館員としてのスキルアップを図る必要性も痛感した。そのため、現職の図書館員のリカレント教育を目的とした慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻情報資源管理分野で学び、修士号を取得した。主な関心事項は２点である。1 つは，修士論文のテーマでもある「私立大学図書館における人的資源管理の問題（特にアウトソーシングの有効活用）」[2] と、「図書館の学習支援活動への関与（特に情報リテラシー教育支援）」である。

図書館を取り巻く環境の変化は著しい。図書館に期待されるサービス体系のイノベーションや運営コスト最適化の要請がなされている。また，外部委託化は、管理職のみならず、専任職員であれば，程度の差はあれ，マネジメントの役割の一端を担わねばならなくなっている。図書館一途の長期キャリア形成は保証されず、現場の体感をもって理解しうる「臨床の知」の蓄積と継承も困難となりつつある。

人員や予算削減という厳しい現状と様々な課題があるが，学習支援および教育研究支援のために何ができるかを考え、その方法を見出して実践し、評価して改善する役割を専任職員は担っていか

なければならない[3]。

以上のような背景と問題意識から、図書館における先進的な取り組みを続ける米国図書館の現状を実際に自分の目で見てみたいと思うようになり，図書館員の継続教育では定評のあるモーテンソンセンターの研修を受けようと思った。

２．本研修での具体的な調査事項と課題の設定

（1）学習支援および教育研究支援のために、どのような具体的な取り組みをしているのか

（2）図書館員の人的資源管理はどのように行われているのか（組織、人件費、ジョブ・ディスクリプション、研修制度等）

（3）帰国後も情報交換ができる人的ネットワークの構築を図る。

上記について、提供される研修プログラムで学ぶと共に資料収集および個別のインタビュー調査を行うこととする。

III. モーテーソンセンターの概要・研修参加者の内訳

モーテンソンセンターは、イリノイ大学図書館内に設置された研修センターであり、世界各国から図書館員を受け入れ、さまざまな研修プログラムを実施している。1991 年の設立以来、これまでに 89 か国から 700 名以上の図書館員が研修を受けている。イリノイ大学や連邦政府の補助金、各国の図書館団体の援助（私立大学図書館協会、国立大学図書館協会も含まれる）などによって運営されており、米国図書館界の幅広い国際的活動を象徴する図書館員の継続教育を目的とした世界的にも類をみない機関である。

今回、私が参加したプログラムには、世界 14 か国 21 名が参加した（参加国：Brazil, Colombia, Costa Rica, El Salvador, Ghana, Japan, Mexico, Nigeria, Pakistan, South Korea, Tanzania, Uganda, Uzbekistan, and Vietnam ）。日本からは国立大学図書館協会からの派遣者１名と私の 2 名の参加であった。内訳は大学図書館員 15 名、公共図書館員 5 名、教育職 1 名であり，図書館長、大学教授、音楽・芸術分野専門のライブリアン、IT 技術者など、その経歴もさまざまであった。

築後，100 年をこえるメインライブラリー

世界各国からの研修参加者

IV. プログラムの概要

１．プログラムの概要

プログラムの内容は，大きく分けて，（1）講義、（2）イリノイ州、オハイオ州の各種図書館および関係団体訪問、（3）現地図書館員等による図書館業務に関する説明、意見交換および交流、（4）短期滞在研修（Host Visit）で構成される。

（1）講義

講義は大きく２本柱で構成される。１つは，イリノイ大学図書館情報学大学院の教員、図書館員によって、図書館組織・経営学、コミュニケーション、最新のテクノロジーの活用，図書

館サービス，図書館・情報学に関連した最新の講義が、シリーズとして行われる。もう 1 つは，イリノイ大学図書館業務に関する，それぞれの担当者からの説明である。

（2）イリノイ州、オハイオ州の図書館および関係団体訪問

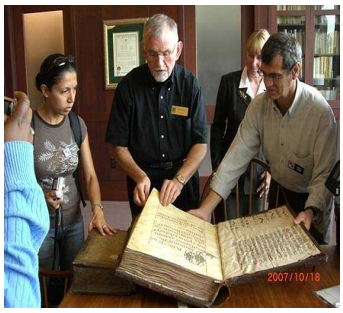
イリノイ大学、オハイオ州立大学をはじめ、大学・高校・公共図書館や博物館、米国図書館協会本部、図書館関連団体を訪問した。

（3）現地図書館員等による各図書館業務に関する説明、意見交換および交流

イリノイ大学図書館や訪問先の図書館員、図書館関係団体等職員による業務説明を受け、意見交換および交流を行う。学内で実施されるイベントや会議に参加をする。また、イリノイ州図書館協会年次総会やイリノイ大学大学院の講義において、研修生がそれぞれの国の図書館事情についてプレゼンテーションを行った。私も立教大学（図書館）の紹介や日本の大学図書館（員）の現状について、人的資源管理の視点から報告をした。

（4）短期滞在研修（Host Visit）

研修生はイリノイ大学以外の図書館に派遣され、３日間の宿泊研修を行う。私は、ミシシッピー川沿いのロックアイランドにある Augustana Colleage [4] にタンザニアからの研修生とともに滞在した。学生数 3000 人のリベラル・アーツ型大学である。学部教員と密接な連携のもとに、学習支援のための図書館サービスの実現、特に情報リテラシー教育への取り組みでは高い評価を得ている。図書館員全員が家族ぐるみで暖かく私たちを迎えてくれた。日本の大学図書館が，実際の業務に適用可能な多くの示唆を与えてくれた。



研修中のさまざまな場面から

２．プログラムの内容

（1）講義

イリノイ大学図書館情報学大学院教員およびモーテンソンセンター講師、イリノイ大学図書館員による講義が、プログラム期間をとおして行われた。

講義では、ただ講義を一方的に聴いているだけではすまない。歴代のプログラム参加者が述べているように、参加者は積極的な発言と講義に関する関与が要求された。米国における大学院の授業を実体験する貴重な機会であった。私は、講義を受講するにあたり、２つの目標を課した。講義中に必ず一度は発言をすること、講義終了後、講師に質問や講義の感想を直接伝え、帰国後も情報交換やアドバイスをいただけるように名刺交換を行うことであった。この課題は果たすことができた。しかし、モーテンソンセンター副所長の Susan Schnuer 氏が，今回の研修参加メンバーを「Ambassador（大使）グループ」と命名したとおり、メンバー各自の発言が活発であり、英語の運用能力の差もあるが圧倒されることもしばしばであった。しかし, 知的刺激に満ちたものであり、有益であった。

①連続講義から

私が最も興味を持ったのは人的資源管理、プロジェクト・マネジメント、ファンドレイジング(資金調達)、最新の図書館サービスについての講義であった。

私の主な関心は、図書館における人的資源管理であり、特に担当講師の Rae-Anne Montague 氏は、講義以外でもインタビューの時間を多くとってくださり，多くの示唆を得ることができた。モーテンソンセンター所長の Barbara J. Ford 氏によるプロジェクトマネジメントの講義では、研修生は短期間で立案から発表までを行った。私は、短期滞在研修を行った Augustana Colleage での実践例を参考に、日本の中小規模大学における図書館員による情報リテラシー教育支援についてのプロジェクトを企画、発表をした。(詳細は Final Report を参照されたい)。各国のメンバーからのフィードバックは、実現にむけて具体的に取り組む際の有益なアドバイスを与えてくれた。

②イリノイ大学図書館員による業務説明

イリノイ大学は学生数約 40,000 人,図書館の蔵書数は 1 千万冊を越え，ハーバード，イェールに次ぐ全米第３位の図書館であり，世界有数の研究図書館として位置づけられる。高度に細分化，高度化された専門性を有する最先端の組織であり，図書館員も単にライブラリアンではなく,「○○ライブラリアン」というように個々の分野のスペシャリストである。大学病院を想像してもらえば理解しやすいだろうか。図書館業務および図書館サービスは多種多様であり，図書館員もそれぞれの分野における専門家集団となっている。内容も利用者サービス，レファレンス・サービス，リテラシー教育，様々な文化的・社会的背景を持つ学生や障害者に対するサービス，収書と目録，資料保存とデジタル化，大学図書館運営，図書館コンソーシアム活動，図書館建築，図書館広報，最新のテクノロジーの実践的活用など多岐にわたっていた。参加者にとっては，自分の所属する図書館業務と比較し，さまざまな質問や討議が行われてとても有意義であった。また実務に直結した知識が取得でき，帰国後の業務に適用する際に参考となる情報が得られた。

③講義から得たもの

学習支援、研究支援のためのサービスを提供する機関として図書館をどのようにマネジメントしていくかについて、さまざまな側面から学ぶことができた。また，最新の情報資源の活用や具体的な図書館サービスに関する紹介は，日本の大学図書館において，どのように適用できるかという問題意識を与えてくれて，とても有益であった。

しかし，講義で提供される図書館サービスの内容は，はじめて聴くというものではなく全て既知のものであった。しかし，個々の図書館員が主体的にそのサービスを実現しているという実行力と

モチベーションの高さ，プレゼンテーション能力の高さに私は最も驚かされるとともに，その点に日米の図書館員の差を歴然と感じた。

（2）イリノイ州、オハイオ州の図書館および関係団体訪問

研修期間を通じて，イリノイ大学，オハイオ州立大学をはじめ，大学・高校・公共図書館や博物館，米国図書館協会，図書館関連団体を訪問した。現地の関係者から詳細な説明を受け，意見交換および交流をした。（表１　参照のこと）

さまざまな種類や規模の米国の図書館を見学できたことはとても刺激的であり，有益であった。大学図書館に関しては，Ⅴ章の米国図書館における動向で詳細に述べることとする。ここでは，訪問によって体感した日米の図書館（員）の本質的な差異について，印象に残ったことを簡単に述べてみたい。

公共図書館では，公共という言葉のもつ日米の差である。公共＝Public であり，日米に差はない。しかし，どうも Public のもつ意味合いが違うということを感じる機会が度々あった。米国の公共図書館を訪問して体感したのは，Public は，「Common，あるいは，私たちが作ったもの」という意識を利用者も図書館員も有しているということである。それに比較して，日本では，「officail, 行政が作ったもの」という意識があるのではないかということである。イリノイ州立図書館を訪問した際，「高額なデータベースを自分の家から誰でも自由に利用できます」という説明があった。それに対して，私が日本では制約がある旨を話し，どうしてそのようにしているのか，と尋ねたところ，「Public Library だから当然である」との返答があった。とても印象的であった。その他，いちいち例をあげることはしないが，公共図書館に対して利用者が抱いている意識の違いがあることをさまざまな訪問の場面で体感した[5]　米国図書館協会本部（ALA：American Library Association，イリノイ州シカゴ）[6] の訪問では，図書館員の地位を社会的に高めるために，さまざまは広報活動を展開しているなど，職能団体としての様々は活動が紹介された。このように確固たる組織横断的な職能団体を有している米国と，個別の組織体系（各大学の事務組織の一部としての図書館組織）の中で働く日本の図書館員の差異を改めて考えさせられた。また，研修期間の後半の４日間で，オハイオ州にあるオハイオ州立大学[7]，OCLC 本部（Online Computer Library Center，オハイオ州ダブリン）[8]，OhioLink[9] を訪問できたことは，良い経験であった。

米国図書館協会本部(ALA)　訪問

オハイオ州立大学にて

表1

訪問先とその種別

月	日	訪問先	大学図書館	学校図書館	公共図書館	関係団体	図書館大会、シンポジウム
9	11	Main Library, UI	○				
		Undergraduate Library, UI	○				
	11	Area Studies Library, UI Africa, Asia, Latin America and Caribbean, Slavic and East European	○				
		Library and Information Science Library, UI	○				
	13,14,15	Symposium on the Future of Integrated Library Systems					○
	16	The Graduate School of Library and Information Science、UI	○				
	20	Chicago Tribune				○	
	21	Chicago Public Library			○		
		American Library Association				○	
		The Newberry Library			○		
	25	Lincoln Trail Libraries System(LTLS)				○	
	26	Urban Free Library			○		
10	2	Oak Street Library Facility, UI					
		Conservation Lavoratory, UI	○				
	4,5,6	Augustina Colleage(Host visit)	○				
	10	Illinois State Library			○		
	11	Illinois Library Association Conference					○
	12	Abraham Lincoln Presidential Library & Museum			○		
	14	Paxton Public Library			○		
	17	Illinois Wesleyan University Library	○				
	20	Arthur Public Library			○		
		Amish Interpretive Center Museum			○		
	23	Lexis Nexis				○	
	24	OCLC				○	
	25	Ohio State Library	○				
		Arkerman Library, OSU	○				
		Thompson Library (renovation), OSU	○				
		Library Book Repository, OSU	○				
		OhioLink				○	
	26	Westerville Public Library	○				
	29	Parkland Colleage Library	○				

※UIは，イリノイ大学

（3）現地図書館員等による図書館業務に関する説明、意見交換および交流

①イリノイ大学図書館の各図書館・部局業務の見学および図書館員による業務説明

イリノイ大学図書館は世界有数の研究図書館として位置づけられる。メインライブラリーと 40 の図書館から構成される。東京大学の図書館組織をイメージしてもらえば理解しやすいだろう。研修中，各図書館，部局を実際に見学し業務説明を受けた。（講義として組み込まれた業務説明については，Ⅳ章２を参照されたい）。

②学内外の会議への参加

イリノイ大学図書館のファカルティ・ミーティングに出席，資料のデジタリゼーション化の取り

組みの実践について学んだ。また，イリノイ州図書館協会年次大会に出席し，４つのプログラムに参加した。

③プレゼンテーションの実践

イリノイ大学図書館およびイリノイ大学図書館・情報学大学院（ライブラリースクール）の講義，短期滞在をしたオーガスタナ・カレッジにおいて，所属大学（図書館）の紹介のプレゼンテーションを行った（資料①）

また，イリノイ大学図書館協会年次総会[10]大会において，日本の図書館の問題についてプレゼンテーションを行った。国立大学図書館協会からの派遣の大阪大学附属図書館の大塚志乃氏と私がそれぞれ個別のテーマについて資料をまとめ，当日は大塚氏が代表して発表を行った。私は日本の図書館の専任図書館員の減少と非正規図書館員の増大による問題点と改善案について，人的資源管理の視点からまとめた（Changing Face of Japanese University Libraries: Replacing full-time librarians with part-time librarians）（The Final Report 参照のこと）

イリノイ州図書館総会で発表

立教大学図書館について説明

④各担当の図書館員への個別インタビュー，ディスカッション

主に，次の２つの関心領域について個別インタビューをさせていただいた。

ｉ人的資源管理（図書館員のジョブ・ディスクリプションと給与との関係，研修制度等）

Rae-Anne Montague 氏，Kristin Vogel 氏，Lee Eung Bong 氏，　Zoe Chao 氏，野口契子氏

ii学習支援に関わる図書館の役割（特に情報リテラシー教育支援）

Connie Ghinazz,氏　Kristin Vogel 氏，岡沢宏美氏

このように研修プログラム以外にも，個別にインタビューができることは，とても有意義であった。

紙幅の関係で詳細に紹介できないが，インタビューに関して特に印象に残ったことを一点述べておきたい。上記ｉに関する一連のインタビューの過程で，日本の大学図書館員が，専門職として認知されておらず大学の他部局への異動があること，図書館員資格（日本の司書と米国のライブラリアンの違い），アウトソーシング導入による専任職員の減少とパートタイム職員の増大という日本の現状を説明した。しかし，図書館員の専門性の確立した米国の図書館関係者に理解してもらうことが案外難しかったことが印象的であった。

⑤モーテンソン・フレンドとの交流

各参加者には，担当のイリノイ大学図書館員が割り当てられ，より親しく交流できるように配慮される。モーテンソン・フレンドと呼ばれ，ボランティアとして募集される。私のフレンドは，Zoe Cha 氏であった。Zoe 氏は資料のデジタリゼーションのスペシャリストであり，その仕事ぶりを実際に見学させてくれた。また，発表資料の原稿の添削をしてくださったり，日常品の買出しや食事

など家族ぐるみで親しく支えてくださった。メンバー一人ひとりにフレンドがおり，メンバーを介して他のフレンドとのつながりができ，多くの交流の機会があった。

特に唯一の日本人図書館員である野口契子氏は,歴代の日本人参加者同様に，私も一方ならぬお世話になった。モーテンソン・フレンドの制度は，研修生にとってとても有益なサポート制度であると思う。

⑤その他

研修プログラムは勿論のこと，研修以外でも各種イベントやパーティへの参加などで，公私を問わず多くの人的交流の機会が提供された。幸いにも私は図書館のすぐ近くにある，私の勤務する大学と同じ聖公会の教会の皆さん（イリノイ大をはじめ他大学の図書館，大学関係者が在籍）に暖かく迎えられ，他の研修生以上に多くの現地の方々と交流が出来た。勤務する大学が国際性という優れた財産を有していることを実感出来たことは大きな収穫であり，誇りであった。年齢や地位に関わらず同僚や仲間をファーストネームで呼び合う米国の文化で生活し，宗教や文化，考え方の異なる人々と英語のみを手段として交流する中で，インターナショナルの真の意味と日本，そして日本の大学図書館（員）を相対的に見る視点を持てたことは大きな財産となった。

また，研修期間中、私たちはキャンパス内のオーチャードタウンという区域にある大学所有の二人部屋のアパートに居住した。宗教や文化の異なる世界各国の家族連れの留学生が居住するオーチャードタウンは、さながら小さな国際社会であった。研修を離れた日常生活の空間においても、研修生同士は勿論のこと、世界各国の留学生とその家族との交流から、私は多くのことを学んだ気がする。図書館は多様な学生，利用者が存在すること，また日本の大学生も今後は世界を舞台に活躍する機会が多くなるであろう。その意味で，広い視野で大学図書館の役割，図書館員としてどうあるべきか，ということを考える視座の１つを与えてくれた思いがある。

（４）短期滞在研修（Host Visit）

研修生はイリノイ大学以外の図書館に派遣され，３日間の宿泊研修を行った。私は，ミシシッピー川沿いのロックアイランドにある Augustana College に, タンザニアからの研修生とともに滞在をした。学生数３千人のリベラル・アーツ型大学である。学部教員との密接な連携のもとに，学習支援のための図書館サービスの実現，特に情報リテラシー教育への取り組みでは高い評価を得ている大学図書館である。

滞在中，学部教員との食事会が２度行われた。学部教員と図書館員との密接な信頼関係が構築されていることが理解できた。特に，ある教員が図書館員との関係を「We teach each other」といった言葉が忘れられない。ディレクターの Carla Tracy 氏によれば,「図書館は常に学部の教育に注意を払い，図書館は速やかにそれに対応できるようにしている」とのことであった。また，ミッション・ステートメントや活動方針，具体的な実践目標が責任者の名前も明示されて Web 上に公開されていた。また，ホスト役を引き受けてくれた Connie Ghinazzi 氏は，レファレンス・ライブラリアンであり，図書館員が主体となって行う情報リテラシー教育の責任者であった。実際に４回，その授業を見学することができた。教育効果をあげるために，図書館フロアの変更も実施したとのことであった。

その他にも，さまざまな取り組みをしていた。ユニークだったのは，今年からの取り組みだそうだが，図書館がキャリア教育の一部を担当していることである。毎週 1 回,「職業を考える，生き方を考える」をテーマに学生と図書館員の討論会を主催していた。図書館員が司会をつとめ，図書館員がそれぞれ発言をする。私も参加し，日本の大学生のキャリア意識，就職活動について話をした。また，さまざまなジャンルの本を一緒に読む読書会も実施されていた。

図書館員全員が家族ぐるみで私たちを迎えてくれた。図書館員が情報リテラシー教育を積極的に

担っていることをはじめとして，日本の大学図書館が学習支援に関わるための具体的なヒントを与えてくれた。ただし，滞在期間 3 日間は短いので，もう少し日数が長い方がより効果が上がる気がした。

Ⅴ．米国図書館における動向

これまでプログラムの概要について説明をした。８週間におよぶ研修期間中，講義，図書館訪問，図書館員との交流等，毎日が刺激的で充実した日々であった。その成果を帰国後，有益に生かすことができるように日々の記録をつけた。８週間の研修記録はＡ４で 58 枚にも及ぶ。読み返してみて，改めて思うことは，学習支援，教育・研究支援のための図書館サービス実現にむけて，自己革新を続ける米国図書館に学ぶことが多いことである。

膨大な研修記録を何度も読み返し，漸次構造化を行った結果，次のような構造，トピックが抽出された。今後の図書館業務の参考になるよう，このトピックに沿って，さまざまな取り組みを紹介していきたい。

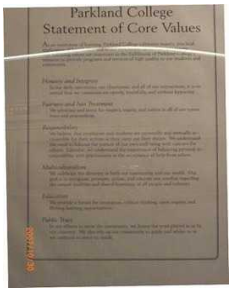
1　米国大学図書館のさまざまな取り組みの事例
　（1）利用者中心の視点
　（2）Web サイトの戦略的活用
　（3）学習支援に積極的に関与する図書館
　（4）情報リテラシー教育について
　（5）学習空間としての図書館
　（6）図書館連携（イリノイ州の場合）

2　図書館活動を支える制度と人（図書館員の役割）
　① 図書館運営（ミッションステートメント，中長期計画，ジョブ・ディスクリプション）
　② 図書館運営（予算）
3　米国図書館の現状とわれわれが学ぶべきこと

1　米国大学図書館のさまざまな取り組みの事例

（1）　利用者中心の視点

大学図書館，公共図書館を問わず訪問した図書館の全てでミッション・ステートメントを見つけることができた。館内のみならず Web サイトに明示されている。共通しているのは，シンプルな言葉からなっていることである。私が感じたのは，大学全体のミッション・ステートメントとの関連が深いこと，大学コミュニティーを構成するかけがえのない存在としての図書館、その自負の表明がなされていること。外部環境や学生の変化に応じて，利用者により良いサービスを提供するために図書館も変えていく（変っていく）ことの表明である。日本の大学図書館は，ミッション・ステイトメントを明示しているところが少ない。



壁面に掲げられたミッション・ステートメント

また，訪問したＯＣＬＣには，“*The User is Aiways Right　！*”の標語が掲げられていた。これは，利用者第一主義。徹底的に利用者からの意見を集め，調査，分析，改良に結びつけていくということであった。また，オハイオ州立大学での図書館員の標語は，“*One Clic*”であった。これは，グーグルやヤフーに負けないために。学生の利用状況調査を徹底的に行っていて，情報へのアクセス時間の短縮を第一目標としているそうである。オハイオ州立大学図書館員との交流会の席上で，一斉に“*One Clic*”と全員が発声したことがとても印象的であった。

訪問したオハイオ州の公共図書館である Westerville Public Library [11] は，先進的な図書館運営と IT の積極的活用で定評のあるところである。ディレクターの Don Barlow,氏が，「利用者のいるところが図書館である」と，我々に説明してくれたことがとても印象的であった。氏の以下の言葉は，まさしく利用者中心の視点を顕著に表しているといえる。

> *“Our service must be anywhere, anytime, and devices of users choosing”*
> *“Anywhere, Anytime, anyway you want. Your library is there”*

（２）Web サイトの戦略的活用

①Web サイトの積極的活用 [12]

イリノイ大学での講義や図書館員とのディスカッションの中で，各担当者から共通に語られたことは，①「利用者はどこにいるのか，学び方は多様であることを意識すること」，②大学の統一形式のもとで各部局がそれぞれ持っている Web 上の情報を速やかに更新すること（館内掲示，パンフレットより早く）であった。これは，積極的に利用者に図書館がアクセスのチャンネルを提供し，それを広報して，図書館（員）の存在意義をアピールしている印象をもった。

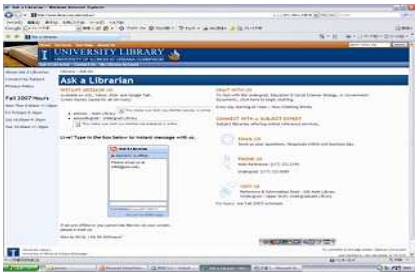
イリノイ大学図書館

オハイオ州立大学図書館

滞在中に変更された。Web を全館的に，定期的に評価する仕組がある。図書館員同士も相互指摘を行い，速やかに改善している。

オーガスタナ・カレッジ図書館

- 利用者にわかりやすく。可能な限り短い時間で情報にアクセスさせる。



②デジタル・レファレンス

イリノイ大学では以下のものがあげられる。

ⅰ　Ask a Librarian(13)

ⅱ　Chat

ⅲ　主題別のデータベース一覧の提示

ⅳ　パスファインダー

ⅰ，ⅱについては，図書館の Web 上にそれぞれの主題専門の図書館員のメールアドレスが掲載されており，利用者は直接，図書館に質問ができるようになっている。また，イリノイ大学図書館では，ライブラリアン１名。ライブラリースクールの大学院生２名が午後 10 時まで待機。利用者からの質問に回答するようになっていた。実際に，担当をした経験のあるライブラリー・スクールに在籍する岡沢宏美氏にインタビューしたところ，基本的にどんな質問でも答える方針をとり，ほとんどの質問に対して２時間以内に回答しているとのことであった。岡沢氏よれば，「Ask a Librarian や Chat は，日本の『交番』の役割を果たしていると思えば，理解しやすい，実際に多くの利用者が活用している」との言葉が印象的であった。

ⅲ，ⅳの主題のデータベース一覧の提供，パスファインダーについては，イリノイ大学，オハイオ州立大学のおいては，様々な主題，学習・教育分野について網羅的，レベル別に用意されていた。この充実ぶりは目を見張るものがあった。研修参加者からは，潤沢な予算や人員は勿論のこと，主題別図書館員を多数，有することによって可能であり，自分のところでは実現は難しいとの感想が多く述べられた。日本の私立大学図書館の多くが単独で作成することは容易ではなく，大学間の連携，コンソーシアム等によって取り組むことも１つの方策であろうと思った。

③バーチャル図書館の試行

イリノイ図書館員の業務説明の中で，Navigating Web2.0, Gaming を図書館での活用について取り組みの説明がなされた。さまざまなバーチャル，Web サイト，ゲームを使って，図書館利用，情報検索能力向上に寄与を目的とするものであった。

カウンターで指定図書を貸出

（３）学習支援に積極的に関与する図書館

①学習支援のための図書館サービスの事例

研修中でもっとも日米の差を歴然と感じたことがある。それは，米国の大学図書館は，正規カリキュラムに不可欠な存在として機能していることであった。具体的には，シラバスが図書館Ｗｅｂサイトに掲載されており，シラバスで指定された図書を図書館で管理。学生は，図書館に指定図書を借りにくる。訪問したどの大学図書館でも例外なく，この機能をカウンターで有していた。

イリノイ大学の Course Resource の事例を紹介したい。これは，　授業（クラス）で利用する資料をまとめて図書館 Web サイトにおいておく。関係するデータベースを使えるようにしておくものである。教員は，資料を図書館（参考室）に持ってくる。それをスキャンしてＷｅｂに掲載している。

次にインターライブラリーローンの事例について，実際に活用した経験をもとに前述の岡沢氏から説明を受けることができた。「利用者の視点」から話を聴くことができ，有益であった。イリノイ大学の場合，希少本以外は基本的に無料で手にいれることが可能（国内，国外を問わず。ただし金額の制限はあるが，図書館員の判断による）となっている。これには，主題専門の図書館員が全面的に協力をしている。図書館 HP から申込み可能であり，更には配送先を指定すれば図書館以外でも受け取ることが可能となっている。つまり，利用者は一度も図書館に来なくても学習や研究に必

要な資料を手にすることが出来るということであった。利用者は，学生は図書館を物理的に利用しているという意識がないのではないだろうか，との岡沢氏のコメントが興味深かった。

②学習支援に関与するための努力

学部・教員との連携の重要性について，訪問した全ての大学図書館で強調された。また，各国の参加メンバーも同様の認識を持っており，この件で多く意見交換をする機会があった。オーガスタナ・カレッジの Carla Tracy 館長にインタビューした。氏によれば，「信頼関係の構築」が最も重要である。学部・教員との連携を強化するための具体的な取り組みとして，定期的なミーティングの開催，教員への情報収集と情報の提供，学部の教学の動向に常に留意，シラバスの読み込み，をあげられた。氏の「カリキュラムに合わせ，図書館サービスを速やかに変化させる。小規模大学だからこそ可能」との言葉が印象的であった。またイリノイ大学アジア図書館の野口契子氏によれば，「自分の関係する教員，研究者，大学院生の研究分野および最新の関心事項はすべて把握をしている。主題専門ライブラリアンであれば，皆同じであろう」ということであった。

（4）情報リテラシー教育について

情報リテラシー教育支援は，米国の大学，特に中小規模の大学図書館のトレンドとなっている。また，IFLA でも国際ガイドラインが示されている[14]。研修中に多くの大学図書館を訪問したが，どの大学も情報リテラシー教育支援に積極的に取り組んでいた。

日本でも同様に，情報リテラシー教育支援が 1 つのキーワードとなり，各大学で取り組まれるようになっている。私を含む大学図書館員 3 名で，大学図書館利用教育で使用される教材 13 種類について，その内容・構成を分類し，それぞれの情報量をもとに主成分分析を行った。その結果，情報を探すための説明に多くのページが割かれていること，自然科学系や学問領域，学ぶためのスキルと作法を指導する教材に特徴的なものがあること，情報を活用する範囲を扱うものがあること，教材にはほとんど扱われていない内容があること，などが明らかとなった。[15]

情報リテラシー教育支援について，私が滞在した Augustana college の事例を紹介したい。この大学は，学生数約 3000 人であり，情報リテラシー教育支援の取り組みでは高い評価を得ている。日本の私立大学の 70%は学生数 3,000 人規模であり，最も参考になると思われるからである。

オーガスタカレッジでは，年間で３００回実施している。学部との緊密な協力関係を構築し，レベル別に各種コースを準備。学生は段階的に履修できるようになっている。興味深かったのは，図書館の１階部分がオープンフロアになっており，講義，実習，調査が同じフロアで可能となっていた。この構成は，教育効果をより高めるために図書館員が考案し，従来あったレイアウトを変更したとのことであった。

Augustana Colleage での情報リテラシー教育実践の様子

今回の研修でイリノイ大学附属高校を訪問し，学校図書館員から説明を受けた。今後の日本におけるリテラシー教育支援を考える際に大きな示唆を与えてくれた。イリノイ大学附属高校では大学図書館と同じシステム(OPAC，各種データベース）が利用できるようになっている。そして高校生

に対して，徹底した「情報倫理」，「活用のルール」，「著作権」に関する教育が行なわれていた。現実の問題をケースメソッド方式で提示し，自由に議論し，学ぶという学習過程が紹介された。大学図書館における情報リテラシー教育も重要であるが，高校生レベルでのこのような学習の必要性，大学図書館と附属高校図書館との連携などについても検討されるべきであろう。因みに，イリノイ大学大学院（ライブラリースクール）に在籍する 2 名の日本人学生にインタビューしたところ，必修科目として「情報とは何か，情報は我々の民主主義にとってどうあれば良いのか」等の本質的な授業が設けられ，徹底的に議論する。このことに大きな驚きを感じたと述べていたことが印象的であった。

（5）学習空間としての図書館

今回の研修で多くの大学図書館を訪問した。その中で日米の差を最も感じたことは，米国の大学図書館は，「学習空間」としての機能を十二分に果たしているということ，また，図書館のレイアウトを含め，それを実現するべく工夫や改善をしていることであった。訪問した大学図書館で共通に見られた事項は次のことであった。①入館ゲートがない（ブックプロテクトはあり），②ペットボトル（蓋のついた飲み物）はほとんどの図書館で可となっていたこと，③カフェテリア（多くの大学図書館にあった。図書館に隣接した形で設置）。

ライブラリースクールの学生に日本の大学図書館事情について説明を行った際に，「日米の大学図書館で最も違うと感じたことは何だったか」と質問された。私は，上記の 3 点が驚いたと答えた。日本では，入館ゲートでカウントされる入館者数は，重要な図書館評価の指標となっている。図書館利用が学習にとって不可欠であり，利用して当然という米国の特徴にもよるだろう。日本の大学図書館で入館ゲートがなくなることは将来的にあるだろうか等，多くのことを考えさせられた。また，利用者にとって快適な図書館空間を意識し，レイアウト等で多様な空間を工夫していた。また，多様な書架，机，イスが配置されていた。

滞在中，図書館での利用者の様子を観察した。個人利用，グループ利用も多いが，良く勉強している印象であった。夜間，日曜日も多数利用していた。利用マナーはとても良い印象をもった。

また，訪問した大学図書館で目立ったのが，入口近くにある総合受付であった。利用者は，まずそこで自分の要件を伝え，適切な助言を受けることができるようになっていた。また，カウンターには，「遠慮なく声をかけてくださいね」という趣旨の，利用を促す手作りのメッセージカードが目に付いた。

学習空間としての図書館（日曜，深夜でも多くの学生が利用していた）

（6）図書館連携（イリノイ州の場合）

私は，大学職員となって教務，広報，企画，人事部門を経て図書館に現在勤務している。図書館に配属されて最も驚いたことは，図書館は，個々の大学が単独で存在することは不可能であり，多くの連携，相互協力のもとに成り立っているということであった。日本でも国立情報学研究所を基盤とした共同目録は言うまでもなく，各種のコンソーシアムが多数存在している。日本のみならず世界中の図書館が相互協力のもとに存在するといってよいだろう。

研修中，図書館連携の重要性について多くの講義や担当者による業務説明があった。また，OCLC や OhioLink など直接関連団体を訪問することができた。イリノイ州の場合は，次の連携がある。Ｉ-Ｓｈａｒｅ（イリノイ州内の大学図書館，公共図書館で構成。資料のＳｈａｒｅ，共同のデジタリゼーションを担う），ＣＡＲＬ（大学図書館，研究機関の学術コンソーシアム）等がある。また，共同の図書館職員研修制度もある。本研修もイリノイ州立図書館が連邦政府の補助金を受けて，イリノイ州内の図書館の協力のもとに実施したプログラムの一部として，モーテンソンセンターとの協力のもと提供されていた。また，イリノイ州立図書館[16]（講義や研修を含め延 3 日間訪問）のコーディナーターを務めてくれた Bonnie Matheis 氏，Alyce L. Scott 氏からは，イリノイ州の図書館が館種を越えて協力しあう図書館連携について貴重なお話しを伺うことができた。特に，①イリノイ州内の資料配送システムによって，どの図書館からも州内各地にある資料が数日で利用可能であること，②貴重資料のデジタル化と一元的な閲覧を可能とするシステムの構築，③図書館員の研修制度については，興味深かった。日本における館種を越えた連携を考える際のモデルになると思われるので，お二人には個別にインタビューをさせていただいた。お二人からは，「イリノイ州は図書館連携が他の州と比較しても進んでいること。それを可能としているのは，核としてのイリノイ大学図書館，イリノイ州立図書館の存在があること。加えてイリノイ州の図書館員が互助の精神を強く有しているため」と言及されたのが印象的であった。研修メンバーがイリノイ州内の図書館に短期滞在を行ったが，これら滞在先の募集，調整，派遣もイリノイ州立図書館とモーテンソンセンターによる共同のコーディナートによるものであった。

研修中に受けた図書館連携に関する説明や実際の訪問を総括して感じたことは，①専任スタッフのいる事務局があること，②個々の大学がコンソーシアム活動に理解が深いこと，である。日本において，図書館連携組織を構築する際に専任スタッフのいる事務局を置く事は容易ではないと思われる。しかし図書館連携を円滑に機能させる何らかの仕組み作りが課題であるとの感想を持った。

Bonnie Matheis 氏，Alyce L. Scott 氏と
イリノイ州図書館にて

２　図書館活動を支える制度と人（図書館員の役割）

（1）イリノイ大学図書館の人員構成

図書館スタッフの人員構成は以下の通りとなっていた。

①図書館員（イリノイ大学図書館員はファカルティ資格を有する）
②図書館スタッフ
③大学院生スタッフ（ライブラリースクールの大学院生。各図書館で働き，レファレンス等も担当。外国人留学生は母国語のカタロギング。１年契約，月給制,重要な戦力として活躍）
④学生スタッフ（カウンター，配架等。時給約 10 ドル）

図書館員は，明確なジョブ・ディスクリプションのもとで仕事をしていた。毎年，Ａｎｎｕａｌ

Ｒｅｐｏｒｔを提出し評価を受ける。評価項目は，①担当する図書館業務の成果，②研究活動（査読付雑誌に年間２本掲載が標準），③図書館全体への貢献（人材育成も含まれる），④対外的活動である。評価は，評価委員会が行う。給与は，評価に連動している。６年以上在籍し審査を経て終身在職権（テニュア）を取得することができる。給与体系表を見ることができたが，終身在職権所有者と非所有者では大きな格差があった。私の研修テーマの１つが図書館における人的資源管理であり，多くの図書館員に上記の内容について詳細にインタビューをした。その中で，図書館のミッションステートメント，それに基づく中長期計画，それを実現する人的資源である個々の図書館員のジョブ・ディスクリプションの明確化と職務遂行結果に対する評価制度が明確になっている米国の大学図書館を体感することができた。

図書館員以外に多くの図書館スタッフや大学院生（ライブラリースクール），大学生が働いていた。研修中訪問した他の大学でも多くの学生が働いていた。特にイリノイ大学のライブラリースクールは全米第１位にランクされ，大学院生の専門知識も高い。それぞれの図書館でレファレンスも担当するなど貴重な人的資源としての役割を果たしていた。立教大学では 2008 年 4 月から，大学院後期課程（博士課程）の大学院生にレファレンス業務の一部を担当させる予定である。日本でも専門知識をもった大学院生の活用をもっと考えても良いと思われる。

（２）図書館運営（ミッションステートメント，中長期計画，ジョブ・ディスクリプション）

図書館運営の面で，①ミッション・ステイトメント，②中長期計画，③各自のジョブディスクリプションの３つが明確に策定され，かつ公開されていることが日本の大学図書館と異なる点である。多くの大学では，図書館Ｗｅｂサイト上で公開をしている。滞在したオーガスタナ・カレッジは中長期計画の項目ごとに，担当する図書館員の名前が明記されていた。

私は，私立大学図書館におけるアウトソーシングの現状と課題について，私立大学図書館（9 校），受託業者（2 社）にインタビュー調査を実施した。その結果を分析し，中・長期計画の策定，ジョブ・ディスクリプションの明確化が必要であることを示した。今回の研修において，米国の大学図書館において，この３点が明示されていることを再認識することができた。

米国の大学図書館では，図書館員を募集する場合，Web 上で詳細なジョブ・ディスクリプション，職務内容，諸条件等を公開する。それをもとに図書館員も応募をし，選抜されていく。日本の私立大学図書館の現状は，図書館専門職としての採用はほとんどなく，すべて総合職としての採用となっている。米国の大学図書館の場合，職務内容に応じた賃金（日本のように年功序列賃金ではない）となっているなど根本的な違いを指摘しておかねばならない。しかし，日本の私立大学図書館の現場では，同じ仕事を専任職員と非専任職員が担っている場合も少なくなく，外部委託に関する問題点の１つともなっている。その意味では，個々の図書館員ごとに明確なジョブ・ディスクリプションは不可能なまでも，専任職員とその他の職員との明確な職務内容を明確にすることは不可欠であるとの認識をもった。

専任職員の役割や求められる資質はどのようなものであろうか。2005 年にモーテンソンセンターのプログラムに参加した独協大学准教授の井上靖代氏が滞在中に，イリノイ大学図書館長　Paula Kaufman 氏や図書館幹部にインタビューをした結果は以下のものである[17]。今回の研修の際にも同様のことをお話されていた。

大学図書館員に期待するもの

（1）分野についての深い知識があること，（2）コンピュータやニューテクノロジーなど最新の技術に対応できること，（3）学生や教員に教える力があること，（4）マーテティングの力があること，（5）図書館をブランド化できること，（6）すばやく考えを発展開発できること。

これらは，専任図書館員が減少し，外部委託化がさらに進む状況の中で，専任職員の担う職務を考える場合，コア・コンピテンスとして参考になるだろう。

（2）図書館運営（予算）

①コスト削減の要請

研修を通して，米国の大学図書館においてもコスト削減の要請が強くなされていることが明らかになった。イリノイ大学図書館では，図書館員の業務は細分化され，専門化された職務に応じたポストが用意されている。最近は，補充を見合わせるポストがあったり，学生スタッフの削減が行われているとのことであった。日本では目録の外部委託が進んでいるが，米国でも多くの大学で外部委託が進んでいることがわかった。

②外部資金の獲得に積極的

研修中，ファンドレイジング（外部資金獲得）という言葉をよく聞いた。ファンドレイジングに関する講義もなされた。図書館予算の 30%はファンドによるものであり，そのうち個人の寄付が70%を占めるとのことであった。図書館員は財源を獲得する必要がある。資金を提供してくれる財団を探したり，獲得のために企画書作成や交渉方法を身に着ける必要がある。印象的であったのは，イリノイ州図書館協会総会の折，参加したシンポジウムで報告された“Ｌｉｂａｒａｒｙ　ｆｕｎｄ　ｒａｉｓｉｎｇ　ｉｓ　ｌｉｎｋｅｄ　ｍａｒｋｅｔ　ｉｍｐａｃｔ”。 モーテンソンセンターの副所長であるスーザン氏に，「これは，どの大学図書館でも同じですか」と質問をした。それに対して，スーザン氏は，「この言葉の通りである。募金は米国の文化として持っている。ゆえに図書館はより良いサービスを提供していくことに心がけること。そして，図書館から常に情報を流し続け，信用を得ていくこと，パトロン（利用者）に繰り返し働きかける，教育していく（どんな小さな子どもであっても）という実践的な取り組みが大切である」とのことであった。日米の文化の相違があるとはいえ，資金を獲得する姿勢，そのためには図書館を理解してもらうために積極的に働きかけるという姿勢には学ぶべきところが多いと思った。もっとも刺激を受けた点である。

③予算獲得のための実践

多くの公共図書館，大学図書館では自ら予算獲得の努力をすることは一般的であるとのことであった。訪問した多くの図書館（公共図書館，小規模大学，コミュニティ・カレッジで目立った）で共通して目に付いたことは，①カフェテリアの運営，②図書館グッズの販売（図書館のロゴの入ったコップ，バック，ハガキ，筆記用具その他）③不要本の販売であった（本が１ドル。AV 等は２ドル程度で販売していた）。すべて，資金獲得の手段として行っているとのことであった。

不要本の販売

カフェテリアを経営

３　米国図書館の現状とわれわれが学ぶべきこと

本研修を通して，日本と米国の大学図書館の仕事内容や課題が類似していることが分った。また Google や Yahoo!などの検索エンジンの登場により，利用者が図書館を介在することなく情報に直

接アクセスできる状況に危機感を抱き，従来型の図書館のままであれば，その存在意義が認知されないことを強く認識している状況も全く同じであった。

しかし，米国の大学図書館は，学習支援，教育研究支援のために図書館サービス実現にむけて，自己革新を続け，さまざまな取り組みをしていた。特に利用者中心の視点，ユーザー・フレンドリーな図書館に変革する取り組みが目立った。モーテンソン研修に参加された井上靖代氏が述べておられるように，図書館一人ひとりが，図書館はなぜ必要なのか，図書館は何をしていて，どんなサービスを提供して，何に貢献しているのかを図書館内外に知らせるために，財政的な裏づけも含め，日常的に努力をしていた。また，そのための実務的な戦略方法を日常的に研究していた。(18)
私も本研修に参加して全く同じ感想をもった。私だけではなく，歴代の参加者も同様の感想を述べておられる(19)(20)。図書館員の個々の力の強さ，この点は，日本の大学図書館（員）が米国の大学図書館（員）に真摯に学ぶべきだと痛感した。

もちろん，大学の学習支援，教育・研究支援に関して，図書館（員）の関わりは日本と米国には明確な違いがあるのは事実である。例をあげれば，米国では図書館員は修士号取得が必須条件となっているなど，教育・研修システムの根本的な相違があげられる。図書館員は専門職として社会的に認知されている。また，米国では学生が講義を受講する過程で図書館利用が不可欠となっている点は，残念ながら多くの日本の大学の現状と異なる。

研修参加者に韓国の Chungnam National Univerity の Lee,Eung Bong 教授がおられたので，韓国の大学図書館，図書館員の現状についてインタビューすることができた。韓国では，1980 年代以降，大学の再編が行われたのに合わせ，図書館員は修士号取得を必須とするなどの改革がなされたとのことであった。司書資格の専門性のあり方，教育・研修システムを含め，日本の大学図書館には多くの課題が山積していることが再認識させられた。

モーテンソンセンターのインストラクターである Kristin,Vogel,Mortenson 氏と日本の大学図書館の現状について度々，意見交換をさせていただく機会があった。氏によれば，「米国の図書館も伝統的な図書館から，20 年をかけて変化，チャレンジを続けてきた。今もその過程である。 その背景には，図書館が変化を求められたという外的な要因が半分，そして図書館（員）自身が改革をしなければと主体的に自覚し変化をしてきたことが半分である」。とのことであった。

いずれにしても，学習支援，教育・研究支援のための図書館サービスの実現のために,自己革新を続ける米国大学図書館の姿勢と，個々の図書館員の積極的な意思と主体的な取り組みに学ぶ点は大きいと思った。

Ⅴ　総括

「利用者のために、あの取り組みを適用できないだろうか。方法は･･･」。イリノイ大での国際図書館員研修から帰国後、たえず考えている。図書館長、大学教授、ＩＴ技術者等、各国からの研修参加者の経歴も多様であった。米国の図書館員や参加者との交流は、仕事に向き合いながら学び続けてこそ、その道のプロになりうることを再認識させてくれる機会となった。

学習支援および教育研究支援のために何が出来るかを考え，その方法を見出して実践し，評価して改善できるものが「図書館のプロ」であろう。残念ながら日本の大学図書館の場合，米国と違い「図書館員」は「図書館のプロ」というわけではない。しかし，私は「図書館のプロ」たらんと努力を続けていきたい。研修中に出会った米国の図書館員はまさしく「図書館のプロ」であり，多くの刺激を受けた。

本研修は，密度の濃いカリキュラムが用意され，また研修プログラムは国際交流および人的ネットワーク構築を目的としたプログラムとして，他に比類のない優れたものであると思う。また，研修終了後に，研修の成果を生かしていけるように期待されたプログラムであり，他の参加者もそれぞれに目的をもって帰国したと思う。日本の大学図書館員の継続研修のモデルの 1 つになると思われる。The　Final report に帰国後，この研修を受けたことを基にして取り組みたいことについて

書いた。その他にも，この研修で得たことを参考に今後の図書館員としての日々の業務の中で生かしていきたいと考えている。

今後，立教大学図書館は勿論のこと，私立大学図書館協会のために，何らかの貢献をできるような図書館員となるように努力を続けていきたい。

謝辞

本研修に参加にあたっては，多くの方々にご指導とご協力をいただいた。特に，プログラムの主催者であるイリノイ大学モーテンソンセンター所長の Barbara J. Ford 氏，副所長の Susan Schnuer 氏に深く感謝いたします。またイリノイ大学図書館員の皆様，特にアジア図書館の野口契子氏には常に暖かいご支援をいただいたことに感謝いたします。また，Host Visit 先として迎えてくれた Augustana Colleage の Connie Ghinazz,氏はじめ図書館員の皆様とご家族の皆様にはたくさんの励ましをいただいたことに感謝いたします。

また，歴代のプログラム参加者の鷹尾道代氏，梅澤貴典氏，峯環氏，高井響氏（以上，私立大学図書館協会よりの派遣），井上靖代先生（独協大学准教授）には，有益なご助言をいただいきましたことに感謝申し上げます。また学術的側面からご助言，ご協力をいただきました三浦逸雄先生（慶應義塾大学教授），宮部頼子先生（立教大学教授），小泉徹氏（立教大学図書館）にも感謝申し上げます。

最後に，海外研修の機会を与えてくださいました私立大学図書館協会国際協力委員会の皆様，長期の海外研修をご許可いただきました立教大学図書館の皆様に感謝申し上げます。

注・引用文献

（1）Mortenson Center for International Library Programs
＜http://www.library.uiuc.edu/mortenson/index.html＞

（2）伊藤秀弥. 私立大学図書館における人的資源管理の現状と課題：アウトソーシングの事例分析をとおして. 慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻情報資源管理分野修士論文, 2007.1, 205p.　大学図書館(9 館)の責任者と受託業者(2 社)へのインタビュー調査により，アウトソーシング導入における留意点を明らかにし，1)経営戦略と中期目標の設定，2)専任の職務と人材育成，3)業務仕様書とジョブディスクリプション，の適用可能性を論じた。

（3）伊藤秀弥.　「図書館のプロ」をめざして. 丸善ライブラリーニュース 復刊第 1 号　2008.2

（4）Augustana Colleage Thomas Tredway Library　＜http://www.augustana.edu/Library/＞

（5）イリノイ大学に留学経験を持ち，ロースクールで集中講義のため滞在されていた弁護士の矢部耕三先生から，日米の違い（社会，文化，大学教育のカリキュラム，図書館のあり方など）にお話しを伺う機会があり，貴重な示唆を与えてくださった。

（6）American Library Associate(ALA)　＜http://www/ala.org/＞

（7）Ohio State University Library　＜http://library.osu.edu/＞

（8）Online Conputer Library Center(OCLC)　＜http://oclc.org/＞

（9）Ohio Library and Information Network　（OhioLink）　＜http://ohiolink.edu／＞

（10）Illinois Library Association（ILA）2007　Annual Conference
＜ http://www.ila.org/events/conference.htm＞

（11）Westerville Public Library.　＜http://www.westervillelibrary.org/＞

（12）University Library University of　Illinois at urbana-champaign
＜http://www.library.uiuc.edu/＞

（13）Ask a Librarian　＜http://www.library.uiuc.edu/askus/＞

（14）　ＩＦＬＡの国際ガイドライン　＜http://www.ifla.org/VII/s42/index.htm＞

（15）鈴木恵津子，伊藤秀弥，井上梨恵子，糸賀雅児. わが国の大学図書館利用教育における教材

の分析．日本図書館情報学会，三田図書館・情報学会合同研究大会.2005．10.22
＜http://wwwsoc.nii.ac.jp/mslis/am_2005.html＞

（16）Illinois State Library
＜http://www.cyberdriveillinois.com/departments/library/home.html＞

（17）井上靖代．米国の図書館は，いま（3）：モーテンソンセンテー国際図書館員研修プログラム（2）」．『みんなの図書館』．2006 年 1 月号 p.47

（18）　同上．P.42

（19）私立大学図書館協会の研究助成を受け，私が研究代表の一人として取り組んでいる調査のために，歴代の私立大学図書館協会海外派遣研修者として派遣されたメンバーの皆さんにご協力いただき，立教大学で座談会を行った。その際，研修体験者として同様の感想を述べられていた。参加者は，鷹尾道代氏・成城大学 2003 年，梅澤貴典氏・中央大学，2004 年，峯環氏・明治学院大学 2005 年，伊藤 2007）

（20）「若きライブラリアンの海外大学図書館研修：Global Librarian Network の形成を求めて」平成 19 年度国立大学図書館協会シンポジウム　＜http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/＞

参考文献

（1）　鷹尾道代氏（成城大学）
「米国における大学図書館員の専門性について：イリノイ大学モーテンソンセンター国際図書館員プログラムに参加して」．『大学図書館問題研究』．No.71，2004，p.17-32.

（2）　梅澤貴典氏（中央大学）．
「米国の大学図書館運営：モーテンソンンセンター国際図書館員プログラム参加報告」『大学図書館研究』．No.74，2005，p.40-54.
「2004 年度海外派遣研修報告書」

（3）　峯環氏（明治学院大学）
「米国の大学図書館における利用者サービスに学ぶ：イリノイ大学モーテンソン・センター国際図書館プログラムに参加して」．『大学図書館研究』．No. 78,2006,p.40-52.
「2005 年度海外派遣研修報告書」

（4）　高井響氏（立命館大学）
「2006 年度海外派遣研修報告書」

（5）　井上靖代氏（独協大学准教授）．
「米国の図書館は，いま（2）：モーテンソンセンター国際図書館員研修プログラム（1）」．『みんなの図書館』．2005 年 12 月号．p.43-50.
「米国の図書館は，いま（3）：モーテンソンセンテー国際図書館員研修プログラム（2）」．『みんなの図書館』．2006 年 1 月号 p.40-49.

（6）　庄ゆかり氏（広島大学　国立大学図書館協会派遣者）
「イリノイ大学モーテンソンセンターFall2006　Associate Program 参加報告」．『大学図書館研究』．No.80,.2007,p.108-119.

University of Illinois at Urbana-Champaign
Mortenson Center for International Library Programs
Fall Associate Program

The Final Report

Hideya Ito

Librarian
Rikkyo University Library
Tokyo, Japan

Sept.4- Nov.2, 2007

INTRODUCTION

This report is a result of my works in attending the two months program at the University of Illinois, Mortenson Center Fall Associate Program.

The program containing the variety of activities and studies offers me a challengeable opportunity to improve my professional knowledge and skills.

I would like to present what I learned with the program. Apart from the result of my study, I will mention the reasons why I came to take interest in the program.

In Japan, librarians working for private university generally do not have professional status, let alone academic status. Most university administrators do not recognized librarians as profession, because they underestimate the value of services that librarians provide to the community. On the contrary, I insist strongly professional status for librarians in private university library.

Due to a shortage of budget, the number of fulltime library staff has been decreasing, while part-time library staffs have been increasing over last few years. I am concerned about this situation in Japan. It is pity that many university administrators mistakenly believe that they have only to increase the quantity to be a library. Whether a college is excellent or not depend partly on not only the size of its library holdings but also the quality of its library services. Then, the excellent library services depend on the motivation and the competence of experienced librarians.

I want to develop a plan to improve the current situation in Japanese private university. The program, I think, provides some ideas to solve the problems we are confronted with.

What I learned/accomplished while I was here

The best of things I learned with the program is that librarians had me recognize again the mission and the value of librarianship. Although librarians and teachers both deal not with thing but with people, it seems that librarian is just the same employee as other staffs in Japanese universities.

I had participated in all programs and put librarians various questions in order to get some suggestion to library problems in Japanese private universities.

Among programs I attended, most useful programs are “Seminars”, ”Tour of the libraries” and Illinois Library Host Program(Augustana College). I had contact

with some librarians and developed personal relationship with them in these programs.

(1) Seminar

Human Resources Management

Change Management

Directing

Lecturer

Rae-Anne Montague, Assistant Dean for Student Affairs, Graduate School of Library and Information Science

Project Management

Lecturer

Barbara Ford, Director, Mortenson center

Fund-Raising Strategies

Lecturer

Susan Schnuer, Associate Director, Mortenson center

Technology-Related Policy Development

Personal Approaches with Information Technology

Lecturer

Kristin Vogel, Mortenson center Instructor

Illinois Digitization Institute (Illinois State Library)

Lecturer

Alyce Scott, Digital Imaging Program Manager. Illinois State Library

It was most helpful for me to listen to the lectures and ask them questions from many angles. Since librarians I mentioned above are knowledgeable persons, they gave me concrete and effective advices.

(2) Tour of the libraries

During my stay here I had many trips and detailed tours to different libraries. All the tours gave me the idea on the library organization, services, collections, programs. New buildings is in planning stage , and it is projected to be completed by 2010.

We are responsible for setting new student service, introducing innovative technology, and planning staff training in the new library. We'll get reference model as far as what excellent library look like.

(3) "Illinois Library Host Program (Augustana College)

The entire Augustana college Tredway library Librarians made me welcome. I cannot thank you enough. I made a report to my director and all the librarians of Rikkyo University. "We should follow the example of Tredway Library.

Librarians have acquired good communication over the years. They inform the college community what we do and why; engage the members of that community in using library services, thereby promoting the integration of intellectual inquiry, academic excellence, and respect for diversity into the fabric of Augustana college. I wish I could emulate the Tredway library. I will make every effort to be good librarian like them.

I was very happy when I saw Connie's message. Connie is my host librarian.

> We thoroughly enjoyed having you visit Tredway Library and I was happy to host you in my home. We share similar traits as librarians, Hideya, and that is that we love what we do. Enthusiasm goes a long way in all aspects of our work and students respond to well planned instruction from someone who loves the process. If we can get them to engage in the process of research, and "enjoy the hunt" then future research projects are much easier.

Future aspiration (What I hope to accomplish once I return to my home library based on my experience with the program)

I hope to accomplish the following things once I return to my home library and Japanese Private University Library Associate (JASPAUL).

(1) Integrate information literacy into basic-level curriculum planning－in collaboration with the faculty－

This plan is to collaborate with the faculty to teach each Rikkyo University student to locate, evaluate, and use information effectively. Especially the core of this plan is to integrate information literacy into basic-level corriculum planning.

Japanese college students generally don't use the Library. The reasons why they aren't directed to use a library by teachers and can get credit without using the library resourses. When I visited Augustana College (Host Institution, October 4-6), one of the faculty members said to me "We teach each other"

I was surprised to hear a good relationship between the faculty and librarian, because Japanese teachers usually don't trust librarians.

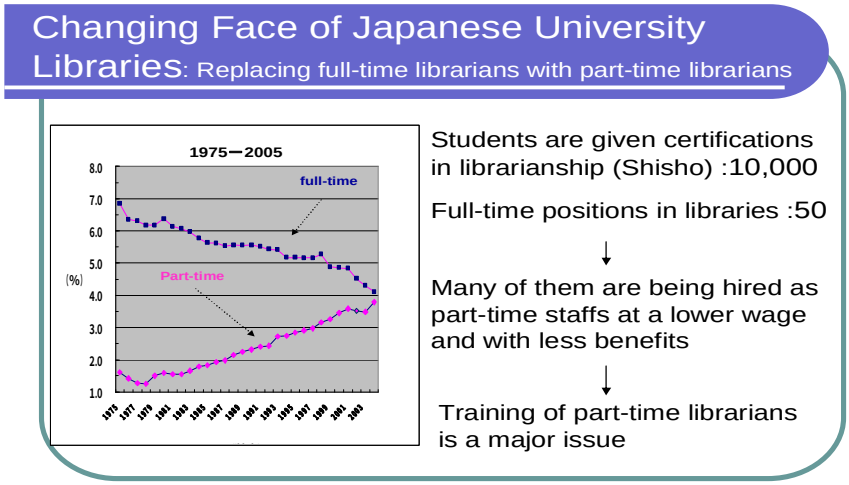
I want to plan for introducing information literacy teaching system by librarians like Augastana College into my university. I want to set up the information literacy teaching room in a new library in planning. Project schedule is the following ;

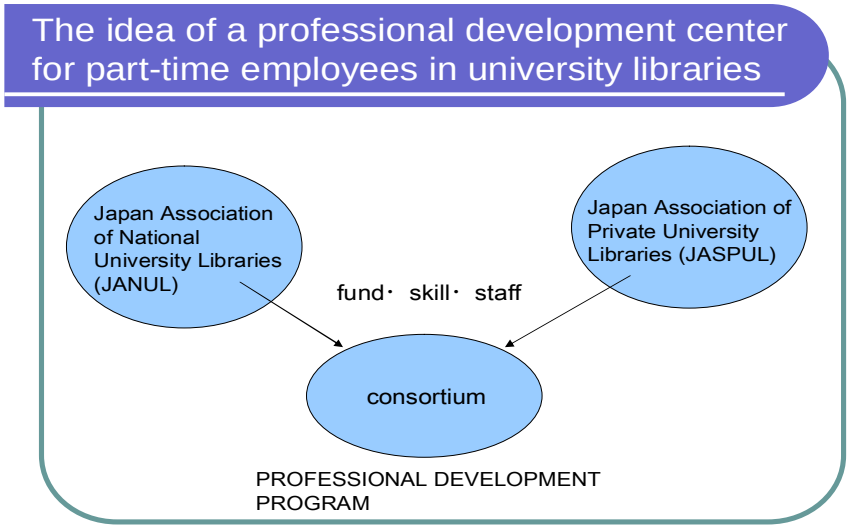
①We will report several cases of American university and college libraries for the faculty members of our university.
② We organize the project team. Faculty members are indispensable for the team.
③We will study curriculum on information literacy for 3 months.
④All library staffs will be given the training for 2 months.

(2) Changing Face of Japanese University Libraries: Replacing full-time librarians with part-time librarians. The idea of a professional development center for part-time employees in university libraries

Last year about 10,000 students were given certifications in librarianship (Shisho) but only 50 found full-time positions in libraries. Many of them are being hired as part-time staffs at a lower wage and with less benefits issue since each library can not afford to address this need and graduate library schools do not provide any training programs for them. What should we do?

As one of solutions to the problem, I'll show you a personal idea of a professional development center for part-time employees. Even if one university library cannot have training programs for part-time staffs, a consortium will be able to do it.





Conclusion

I am sure that Mortenson Center is a great institution. I hope it is developing, growing, improving constantly.

I give my seal of approval that Mortenson associate programs are diverse and high-quality program. If Japanese university administrators and librarians have been to Motrtenson center, they must be impressed by the excellent librarianship . Thanks to the program Mortenson Center offer me for the two months. I work with confidence without doubting the value and the mission of librarianship. After coming back to Japan, I will write many papers and my experience as a Mortenson Associate will contribute surely to my home library and Japan Private

University Library Association.

I would like to thank all people, who directly or indirectory helped me in accomplishing my profession goals, particulary Mortenson Staff.

Lastly I would like to express my grateful appreciation and many thanks to Barbara and Susan. I wish I could emulate Barbara and Susan. I will make every effort to be good librarian like Barbara and Susan.